

リマスタード・ピンチョン

— 最新長編 *Inherent Vice* を読む —

波戸岡景太

Hatooka Keita

エンドレス・サマー
終わりになき夏もとうに過ぎ去ろうとしていた 1970 年代初頭のアメリカ西海岸。ロサンゼルス郊外のビーチにしがたい探偵事務所をかまえる Larry Sportello (通称 Doc) は、突如現れたかつての恋人 Shasta に助けを乞われ捜査を開始するも、そこに待っていたのは想定外の殺人、目的不明の誘拐、ロス市警と FBI の双方から持ちかけられる裏取引の誘い、さらには、麻薬と偽札をめぐる国際的な陰謀と「黄金の牙」なる暗号じみた呼称の氾濫だった——。

前作『アゲインスト・ザ・デイ』から 3 年、同じカリフォルニアものとしては『ヴァインランド』以来 19 年ぶりに書かれたピンチョンの新作は、ポストモダン小説のマスターピース『競売ナンバー四十九の叫び』(1966) の文学世界を、作者自身がおよそ半世紀ぶりに、おおいなるゆとりと磨き抜かれた職人技をもって書き直したかのような秀作長編だ。

さて、「インヘレント・ヴァイス」という題名だが、一般にこれは「固有の瑕疵」と訳される。この言葉、あまり聞き慣れ

ないのも道理で、実は損害保険に関する専門用語であるという。たとえば、船で輸送中の果物が腐ってしまったというケースなど、保険対象それ自体に内在するリスクが問題となる時に用いられる。海上保険は、そうしたリスクの想定されるものをあらかじめ「固有の瑕疵」と呼ぶことにより、免責事項にしてしまうのだ。およそすべてのことがらは補償が可能であるという単純な保険論的システムにのっとりた世界観が、あらかじめ免責にされていた「固有の瑕疵」によって静かに打ち崩されていく。そうした崩壊の瞬間を、絶望ではなく希望の瞬間として目撃するのが、本作の語り手 Doc に課せられた、最終的な使命である。

保険用語をタイトルとする本書は、何よりも「カネ」を最大のテーマとする。物語の冒頭でビートルズの定番 “Can't Buy Me Love” を口笛で吹く Doc 自身、「カネで愛は買えない」などと本気で考えているわけもない。元恋人の Shasta が陰謀に巻き込まれたのも、彼女がロサンゼルス随一の開発業者 Mickey Wolfmann の巨万の富に目がくらんだせいだと Doc は想像するのだが、一方で、カリフォルニアの土地と西海岸の向こうに広がる公海を舞台とした大規模なカネの流れは、彼らヒッピーたちの無料な愛など端から相手にしていない。

では、本作に流通する黒いカネは、いったい何を買占めたというのだろう。Wolfmann の身辺でおこる殺人事件にしても、致死量のクスリを処方されたサックス奏者の数奇な運命にしても、はたまた「ゴールデン・ファングに気をつけろ！」という警告にしてみても、どれもみな、いわゆる推理小説の体裁を借りた『インヘレント・ヴァイス』にとっての、中心的な事件とはなりえない。

ロス郊外からラスヴェガスにかけて、私立探偵 Doc はハッパとクスリにまみれながら、不徹底だけれど執拗な潜入調査を続けていく。明らかになっていくのは、体制側に雇われた反乱分子たちの生態、腐れ縁だった刑事の語られざる過去、Wolfmann を取り巻くギャングやドラッグ・ディーラーたちの確執、そして、チャールズ・マンソンの悪夢によって根本から覆されてしまったシックスティーズの楽観主義的世界観。しかし、本来ならば物語の最後に、探偵自らが華麗に再現してみせなくてはならない肝心の事件の真相が、そこでは最初から、決定的に損なわれている。

そう、本作の事件の真相は、たとえピンチョン文学特有のパラノイアをいくら積み上げて再現することがかなわない過去という現実。無論、黒いカネをいくら投資したところで、それを手にすることは誰にもできない。そうした「固有の瑕疵」を抱えた推理小説を指して、作家は『インヘレント・ヴァイス』と名付ける。その物語が目指すのは、どこまでもしたたかな、近過去に対する認識論的な文学実践だ。かくして、“Can’t Buy Me Love” の口笛とともに始まり、ビーチ・ボーイズの “God Only Knows” でフェードアウトしていくピンチョンの新作は、そうした 60 年代サウンドをリマスタリングするかのようにして、同時代にはうまく聴くことのできなかつた西海岸の不穏なざわめきを今一度、僕らの耳にくっきりと響かせてくれる。(Inherent Vice by Thomas Pynchon. The Penguin Press, 2009, 369 pp., \$27.95)

(明治大学講師)